

## 科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成25年 5月 27日現在

機関番号：32689

研究種目：研究活動スタート支援

研究期間：2011～2012

課題番号：23820053

研究課題名（和文） 貿易品としての近世インド絨毯の生産と国際流通に関する実証的研究

研究課題名（英文） Study on the production and distribution of early modern Indian carpets as trade goods

研究代表者

鎌田 由美子 (KAMADA YUMIKO)

早稲田大学・高等研究所・助教

研究者番号：70609768

研究成果の概要（和文）：本研究では、17-18世紀にインド北部と南部で織られた絨毯には、どのような特徴があるのか、貿易品としてどのように国際流通し、各地で受容されたのかを、国内外での調査をもとに考察した。その結果、従来「ラホール絨毯」という名称で分類され、ムガル朝のもと、北インドで生産されてきたと考えられてきたインド絨毯のなかには、インド南部の絨毯生産地で、輸出先の好みと需要を反映して貿易用に織られたものが少なからず存在することが判明するとともに、絨毯そのものの価値に加えて、絨毯が受け入れられた社会的な文脈が新たな価値を生み出していく様子が明らかになった。

研究成果の概要（英文）：The aim of this research was to reveal the characteristics of carpets produced in both north and south India from the seventeenth to the eighteenth century and examined their distribution and consumption in accordance with people's demands in different areas of the world. As a result, it becomes clear that some of the carpets traditionally named "Lahore carpets" and attributed to north India were most likely woven in south India as trade goods. Moreover, the value and significance of these imported carpets varied depending on the social context in which these carpets were accepted.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2011年度	1,300,000	390,000	1,690,000
2012年度	1,100,000	330,000	1,430,000
年度			
年度			
年度			
総計	2,400,000	720,000	3,120,000

研究分野：美術史

科研費の分科・細目：美学・美術史

キーワード：イスラーム美術、インド美術、染織研究、絨毯、交易

### 1. 研究開始当初の背景

絨毯研究は日本ではあまり認知されていないが、イスラーム美術史や染織を専門とする研究者によって、欧米を中心に研究が行われてきた。インド絨毯については、主に北インドで制作された絨毯が研究され、南インド（デカン）で制作された絨毯については十分

な研究がなされたとは言えなかった。

近年の研究で、京都祇園祭の懸装品として江戸時代から使用されてきたインド絨毯のなかに17世紀後半から18世紀にかけての南インド産と考えられるものがあるほか、類似するタイプのもので、インドや欧米など世界各地に存在することが分かってきた。

南インド産の綿布が 17 世紀以降、貿易品として人気を博し、世界各地へと輸出されていたことは良く知られているのに対し、貿易品の観点から取り上げられることのほとんどなかった南インドの絨毯に焦点を当てて、北インド産の絨毯と比較しつつ、それらがインド内部でどのように流通したのか、いかにして海外にもたらされ、各地で受容されたのか、明らかにしていく必要がある。

## 2. 研究の目的

(1) 17 世紀から 18 世紀に制作された北インド産の絨毯と南インド産の絨毯のそれぞれについて、それらが、どのような国際交易ルートで流通したのか、また、インド内部でどのように流通したのかを具体的に明らかにする。

(2) 18 世紀に日本では、なぜ、インド絨毯が祭礼用の山鉾の懸装品として受容されたのか。日本でのインド産絨毯の流通・受容について考察する。

(3) 懸装品には新調にかかわる文書などが残っているため、このタイプのインド絨毯の制作年代の下限が分かる。これを手掛かりにして、これまで十分な研究のなされてこなかった南インド産の絨毯の編年の手がかりを得る。

(4) デカン産絨毯の特徴を明らかにし、それを近年研究の進展した、デカンのイスラーム王朝のもとで発展した工芸品・建築の特徴と比較することで、デカンで展開した美術の特色と社会的・文化的な背景を明らかにする。

## 3. 研究の方法

(1) インドのジャイプール宮殿博物館とアーマダバードのキャリコ美術館において、デカンで 17-18 世紀に生産されたと思われる絨毯の調査を行う。キャリコ美術館の絨毯コレクションのなかには、かつてジャイプール宮殿に保存されていたものも含まれている。また、日本国内に残る、江戸時代に伝えられた個人蔵の絨毯を調査する。その調査結果をこれまでに得たデカン産絨毯の組織に関するデータと比較する。

(2) バタビアからアムステルダムに送られた、世界各地のオランダ商館の報告書の抄録をはじめ、各種史料から、南インドのどこから、どのようなタイプの絨毯がどのようなルートで輸出されていたのか調査する。また、オランダ商館長日記などの史料から、日本においてインド絨毯がどのように用いられていたのか明らかにする。

(3) デカン産絨毯に見られるモチーフと、デカンのイスラーム王朝のもとで制作されたテキスタイルや、ビーダル・ウェアなどの金工品、建築物に見られるモチーフを比較する。

## 4. 研究成果

(1) ジャイプールの宮殿博物館の倉庫において、絨毯の調査を行ったところ、これまでは「ラホール絨毯」と分類され、北インド産とされてきた大型絨毯 2 枚は、絨毯の組織やモチーフ、素材などの面から、南インド産である可能性が高いことが明らかになった。アーマダバードのキャリコ美術館に行き、サーフ絨毯と呼ばれる南インド産の絨毯を見ることができた。これらのことから、南インド産絨毯は、南インドや日本を含む海外で使用されただけでなく、インド北西部にももたらされジャイプールの藩王のもとでも使用されていたことが分かった。

ジャイプール宮殿にかつて保存されていた北インド産の絨毯の一部は、20 世紀初頭に流出し、現在では欧米の主要な美術館や博物館の所蔵となっている。そのようなコレクションのひとつである、アメリカのシャングリラ・イスラーム美術館で、17 世紀半ばに北インドで織られた「変形絨毯 (shaped carpet)」と呼ばれるタイプの絨毯を調査し、データを取った。それらは、17 世紀半ばのムガル朝宮廷で流行した、西洋の本草書からとった植物文を織り出しており、組織は 17 世紀の北インド産絨毯に見られるものであった。同美術館には、18 世紀の北インド産とされる大型の絨毯があり、調査したところ、組織や素材、細部のモチーフや色合い、手触り、織密度などさまざまな点において、18 世紀のカシミアルやラホールなどの北インドで生産された絨毯とは異なっているのに対し、同時代の南インド産の絨毯とは類似点が多いことが判明した。

同じタイプの絨毯は、ポルトガルなどヨーロッパに多く残っている。18 世紀のインドの状況を考えると、このタイプのインド絨毯は、コロマンデルコーストと交易路によってリンクされているエロールやワランガルなどといった南インドの絨毯生産地で織られ、インド更紗などと同様に、コロマンデルコーストから、東インド会社や私貿易商人の活動によって海路ヨーロッパにもたらされたと考えられる。比較的良好に研究されてきた北インド産の絨毯とは対照的に、南インド産の絨毯に関しては研究が遅れていた。そのため、従来、慣習的に「ラホール絨毯」と呼ばれて北インド産とされてきた一群のインド絨毯のなかに、実際には南インドで貿易用に生産されたものが少なからずあることが浮かび上がった。

(2) 京都の個人が近年購入した、京都祇園祭や徳川美術館が所有しているものと同じタイプの絨毯を調査し、データを蓄積した。このタイプの絨毯は赤地に花やパルメット文を幾何学的に配置したもので、南インド産

の絨毯の特徴を持っている。日本では、遠山記念館や滋賀県高島市の大溝祭の見送り幕にも同じタイプのものであるのに対し、欧米では一枚も現存例が確認されていない。欧米に残るデカン産絨毯と考えられるものの多くは、より淡い色合いで細かな連花文を用いており、比較的大型であるのに対し、日本に多く残る赤地に幾何学的に配置された花模様絨毯は小型であり、輸出先の好みと需要が反映されていることが分かる。1929年に撮影されたジャイプール宮殿の絨毯コレクションの写真のなかには、日本に残るものと同じタイプの小型の絨毯が撮影されていることから、インド国内ではデカン地方以外の場所でも使用されていたことがうかがわれる。

1630年代にラホールで織られたことが記録に残っている「ガードラー絨毯」をはじめ、17世紀初めに北インドで織られた上質で、細かな模様を織り出した絨毯は、ヨーロッパの人々にとって憧れの対象であり、17世紀初めには、オランダ東インド会社が徳川将軍や高官に北インドの絨毯を贈った。一方、主に18世紀にもたらされた南インド産の絨毯は、織も粗く、素材も決して高価なものではない。しかしながら、羊毛のパイル絨毯の存在しない日本では、鮮やかな赤色とともにその希少性が尊ばれ、祭礼を荘厳するのにふさわしいと考えられたようである。そのため、北インド産絨毯よりも質の劣る南インド産絨毯は、18世紀には京都祇園祭を担う富裕な商人たちを始め、琵琶湖沿岸の長浜や高島の商人も入手して、懸装品として用いるようになった。山鉾町の絨毯に関する文書の写真帳を調査し、18世紀半ばに新調されたものが多いことを確認した。

(3) デカン産絨毯を、デカンの宮廷用に織られたものと、海外への貿易用に生産されたものを分けたうえで、近年研究の進展したデカン地方の美術・建築と照らして様式的に分類した。その結果、デカン産絨毯には、ペルシアの要素、北インド(ムガル朝)の要素、デカン独自の要素が見られ、それらの要素が融合して独特の様式をなしていることが分かった。特に重要なのは、ペルシアの要素で、1679年のイギリス東インド会社の史料には、デカンのエロールでは16世紀半ばから、ペルシア移民がペルシア様式で絨毯を織っていたことが報告されている。

一方、デカン産絨毯には、フィールド部分(絨毯の中央部分)に迷路のようなデザインを配置したものがある。これは、ペルシアや北インドの絨毯のデザインには見られないが、南インドのビージャプルのイブラーヒム・アーディル・シャー2世の墓であるイブラーヒム・ラウザの天井や壁面には確認できる。こうしたことから、ペルシアや北イ

ンドのデザインを摂取したり、輸出先に好まれるデザインを志向するばかりではなく、デカン独自の美術伝統も絨毯のデザインに根強く反映されていたことが分かった。

(4) 研究成果を論文や口頭発表の形でまとめた。特に、インド美術や交易に関連する学会やシンポジウムでの発表を通じ、専門分野の近い研究者からのフィードバックを得るよう努めた。デリー大学での異文化間接触に関する国際シンポジウムや、メトロポリタン美術館でのシンポジウム、モントリオールのマギル大学でのインド洋交易に関する国際会議での研究発表を通じ、研究者たちとの有意義な意見交換をすることができた。

## 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計5件)

鎌田由美子 “Woven Flowers: Persian and Indian Carpets in Early Modern Japan” *Oriental Art* vol. 44 (2013), pp. 53-61 (査読有)

鎌田由美子 “Carpets and Textiles in the Iranian World 1400-1700 (Book Review)” *The International Journal of Asian Studies* (Cambridge University Press), vol. 10, issue 1 (2013), pp. 94-96. (査読有)

鎌田由美子 「貿易品としての南インド産絨毯—京都祇園祭と長浜曳山祭の絨毯を中心に—」『美術史』173(2012), pp. 102-119. (査読有)

鎌田由美子 “The Use of Imported Persian and Indian Textiles in Early Modern Japan” *Textile Society of America Symposium Proceedings* (2012) paper 701, pp. 1-11. (査読有) (<http://digitalcommons.unl.edu/tsaconf/701>)

鎌田由美子 「絨毯研究の方法と今後の可能性」『東京大学東洋文化研究所附属東洋学情報センター報』28(2012), pp. 6-8. (査読無)

[学会発表] (計7件)

鎌田由美子 “The Indian carpet as a commodity in Edo-period Japan” *The Trades and Consumption in the Indian Ocean, from Early Times to the Present*, マギル大学、モントリオール、カナダ、2012年11月2日 (査読有)

鎌田由美子 「デカンか北インドか：遠山記念館所蔵鳥獣文絨毯の産地と来歴をめぐって」

美学会 東部会例会、慶應義塾大学、2012年  
6月2日（査読有）

鎌田由美子「17-18世紀のデカン地方におけ  
る絨毯生産：デカン美術の観点から」日本中  
東学会 第28回年次大会、東洋大学、2012  
年5月12日（査読有）

鎌田由美子 “North India or Deccan?  
Reconsideration of the provenance of several  
carpets at The Metropolitan Museum of Art”  
Discoveries: New Research on the Collectios of  
the Department of Islamic Art at the Metropolitan  
Museum メトロポリタン美術館、ニューヨー  
ク、アメリカ、2012年4月13日（招待講演）

鎌田由美子 “Early modern Indian carpets as  
media for cross-cultural interaction,” Asian  
Encounters: Networks of Cultural Interaction, デ  
リー大学、デリー、インド、2011年11月1  
日（査読有）

鎌田由美子 “Deccani carpets in Japan: Indian  
carpet trade by the Dutch East India Company”  
The American Council for Southern Asian Art  
Symposium, ミネソタ大学、ミネアポリス、ア  
メリカ、2011年9月24日（査読有）

鎌田由美子「貿易品としての南インド産絨毯  
—京都祇園祭と長浜曳山祭の絨毯をめぐつ  
て」美術史学会全国大会、同志社大学、2011  
年5月20日（査読有）

〔図書〕（計2件）

鎌田由美子「インドの絨毯」公益財団法人祇  
園祭山鉾連合会『京都近郊の祭礼幕調査報告  
書：渡来染織品の部』2013年、pp. 8-14.

鎌田由美子 “Pashmina carpet fragment”  
in *Masterpieces from the Department of  
Islamic Art in The Metropolitan Museum  
of Art* edited by Sheila Canby et al. The  
Metropolitan Museum of Art, New York,  
2011, p. 374.

## 6. 研究組織

### (1) 研究代表者

鎌田 由美子 (KAMADA YUMIKO)  
早稲田大学・高等研究所・助教  
研究者番号：70609768

### (2) 研究分担者

なし

(3) 連携研究者  
なし